

空



2014・10

SORA 57号

歸省

柴田 佐知子

梅を干す外輪山の底広し

塩舐むる牛の背に立つ雲の峰

山近く見ゆる素足になりてより

清水に手浸して罪のあらはなり

秋晴の真中にある仔牛の目

晴れ渡る山に囲まれ種を採る

帰省して赤ん坊に髪引つ張らる

盆過ぎの母を浮かべし青簾

僧が座についてしづもる盆の家

蟪蛄を啜へて猫が振り回す

出張は黒づくめなり秋の風

真夜中の案山子は隣田へも行ける

白塗りの男は神ぞ秋まつり

裏山の風は藍いろ猿酒

芒野をゆく業平を思ひつつ

山国に青空の蓋秋深し

月の道
高倉 和子

一人づつ攫はれさうな月の道

出奔といふ選択も黒ぶどう

八朔や煙のごとき雨が降る

母の世へ消えてゆきたる秋の虹

鶏頭の追ひつめられし色となる

晴れてゆく山が近くに白露かな

新しき鳥居に小鳥来たりけり

台風のそれで青空見るばかり

指人形
中田 みなみ

野分晴瓶の蜂蜜うつくしき

噴水や永き平和に生かされて

広島忌黒く流るる蟻の列

螢草小橋をくぐる日の流れ

辿り着く峠まゆみの実の笑ふ

一位の実冷たきまでの紅さかな

籠蟬の雫鳴きして更けゆけり

秋さびし指人形を頷かせ

要らぬもの 荒井千佐代

月下美人 服部早苗

昼寝覚め夢のつづきの波の音

かの茂みこちらの茂みつなぐ橋

はたたがみ吾に家族てふ方舟や

いちにちは鱒のとなりにもて無言

風鈴を指もて鳴らす別れ来て

ほんたうは裏を見てゐる揚花火

子猫はや我を威嚇す台風圏

下校時の子どももの走る日雷

ロザリオを握りて眠る星月夜

朝顔の摘心悔いてをりにけり

要らぬもの殖やす現世や秋澄めり

月下美人不意の客めく固蕾

三輪車つつこんである白粉花

月下美人ふくらみそめし夕餉時

玄室を出でて夕立に打たれけり

月下美人一花の気韻満つる闇

安全旗

柴田志津子

泉にて折り返したる獣道

しづけさや水田あかりの戒壇院

炎昼の飯場に高き安全旗

訪問販売ことはつてゐる網戸越し

穴惑ひ金剛杖に払はるる

送り梅雨灯をとびとびに平家村

砂浴びの鶏が駆けだす日雷

秋立つや町の要に消火栓

草の花

だいじみどり

夏痩せの肩のあたりの強気かな

人間にまへやうしろや更衣

黴の噴く旧家にひとり住まひかな

新聞へ氷小豆のしづくあと

ながながと雲よこたはる半夏かな

遠いとは思はぬ青田青田かな

澄みわたる天の下なる災害地

門と言ふよりはいりぐち草の花

長崎 野上 杏

白南風に両手さしのベマリア像

夏潮や十字架の白まぎれなし

昼の鐘ひびく外海の雨燕

一礼し入る教会汗ひきゆく

朝顔や信徒しづかにすれちがふ

殉教の断崖に立つ氷旗

白さるすべり街を見下す殉教碑

祈ること多きながさきただ灼くる



粕屋 秋 千 晴

観衆は闇の中なる薪能
薪能時折闇の濃くなりぬ
化身出て炎荒ぶる薪能
薪能影が大きく先を行く
土蜘蛛の糸の降りくる薪能

糸 田 宮 井 知 英

追はれ来し鹿の眼が正面に
竜胆は踏まれてをらず獣道
旧道は鹿の抜け道山日濃し
濃き色の花より崩れ大花野
盆道の見えて来るなり鎌の先

福岡 あさなが捷

家系図は死者の名ばかり稲の花
新羅人移り来し里柿熟るる
地藏堂に箒掛けられ秋うらら
波打ちて走り根越ゆる秋の蛇
曼珠沙華目をのぞかれて落着かず

福岡 田 代 貞 枝

七月の真青な空へ夫逝きぬ
蟬しぐれ血縁黒く集ひけり
独り夜の重さのがれて桃をむく
念仏の僧に唱和し秋すだれ
菊活けて心静むる七七忌

大阪 青木 朋子

巡行の都大路を夏燕

山鉾や天を突き刺す松の揺れ

鉾祭馬上の稚児の眠りをり

水掛けて大船鉾の辻廻し

瀬の鷺に近づく祇園囃子かな

福岡 井浦 美佐子

芋の葉や少し傾ぐは顔のやう

日焼して言葉少なき変声期

葛覆ふ荒地の起伏あるばかり

鶏頭に日月過ぎし重さあり

はらからは目元に現れて生身魂

福岡 吉村 摂護

秋陽燦蝮子を吐く昼下り

浮いて来い今更ながら麻疹とは

港より巨船押し出す残暑かな

爽かや玄界灘は竿の先

休耕田敷地に変る厄日かな

須恵 苑 実 耶

炎帝や筋違ひなりその抗議

猫の目の大きくなりし水中花

床軋む残暑の薬博物館

踊の輪見様見真似で加はれり

鶏頭や泣きやまぬ子を連れ出して

福岡 亀井紀子

峰雲のくづれ連山隠しけり
大木に鎖のごとく蟻の列
身を反らす少年兵や雲の蜂
ずぶ濡れになりて戻りぬ盆踊
秋来る都市をつらぬ雨柱

山梨 野畑さゆり

湧水を汲む列に入る普羅忌かな
白木槿アルプスせまる無人駅
くちなはや開拓村へ峠越ゆ
虫しぐれ文字薄れたる道しるべ
逆上がりうまく出来さう秋の空

粕屋 吉田 葎

英雄のひしめく畳山笠用意
飾り山笠どの英雄も怒り肩
五秒前山笠の舁き綱持ち直す
団扇もて軍師の弾く勢ひ水
山笠のすつかり果てし潮汁

長崎 鳳 蛮 華

涼しさや名城にして無彩色
初夏の棚田ジグソーパズルとも
蝙蝠を小石で追へり草野球
杉玉の色が新酒の熟れ加減
自己中が猫の取り柄よ籐寝椅子

兵庫 戸 栗 末 廣

戦争のはじまりさうや蟻の列
ががんぼの脚の全き整形科
誘蛾灯はかなきものを照らしをり
昼寝覚すでに晩年来てをりぬ
母のことほとんど知らず走馬灯

福岡 樋 口 みの ぶ

炎天や赤子を庇ふごとく父
年ごとに凶太くなりぬ花カンナ
ハミンクのうたごゑとなる花野かな
群るること好きで夕べの赤蜻蛉
秋冷や供花に埋もれし母の顔

福岡 山 内 碧

ごはごはのシャツより逃ぐる日焼の子
帰省子の作つてくれし卵焼
薄切りの梨を僅かに臥す母は
妹に母の背とられ秋の蝶
長崎やひしめく家へ大夕立

福岡 栗 原 京 子

足はづし厨にもどす茄子の馬
漆黒の海を一途に精霊船
秋晴や水が隔てし猿と人
金魚飢ゑ水面沸騰してゐたる
ちぎりても減らぬとくれし夏蜜柑